草紙

五木寛之

文藝春秋

五木寛之（いつき・ひろゆき）

1932（昭和7）年9月福岡県に生まれる。生後まもなく朝鮮にわたり47年引揚げ。52年早稲田大学露文科に入学、57年まで在籍。業界紙編集者、レコード作詞家、ルポライターなど多くの職業をへて66年「さらばモスクワ愚連隊」で第6回小説現代新人賞、67年「蒼ざめた馬を見よ」で第56回直木賞を受賞。「青年は荒野をめざす」「デラシネの旗」「青春の門」「風に吹かれて」ほか多数の作品がある。

白夜草紙

昭和五十年二月十五日　第一刷

著者　五木寛之

発行者　樫原雅春

発行所　株式会社文藝春秋

〒一〇二東京都千代田区紀尾井町三

電話東京（〇三）二六五―一二一一

印刷所　凸版印刷

製本所　大口製本

製函所　加藤製函

＊万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

© Hiroyuki Itsuki 1975　Printed in Japan

白夜草紙／目次

第一章　墓地と星条旗　7
第二章　譜面と口紅　38
第三章　ゲリラと口笛　60
第四章　雨に歩けば　79
第五章　ホテルの中の迷路　99
第六章　のぞきの同志　119
第七章　女たちの友情　137
第八章　夜の工作者　160
第九章　山中節とポルノ　179
第十章　歴史と台風　199
第十一章　善意と犯行　219
第十二章　夜のはじまり　237
あとがき　255

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

白夜草紙

装幀　竹内和重
函・扉・本文イラストレイション　河本怜

白夜草紙

あたかも昼のように見えるが、実は夜なのだ。——カーメネフ——

第一章　墓地と星条旗

――左手に人気のない小さな砂浜があり、その上にユースホステルか、または国民宿舎といった感じで白い建物が見えている。長くつきだした岬によって外洋と仕切られた湾内は全く波おだやかで、やや黄色味をおびた明るい緑色だ。日章旗を立てた小型船が一隻、湾を横切って行くのだが、そのほかには人影ひとつなく、しんと冴え返った静けさが水平線に漂っている。空はまるで童話の絵の中に描かれた空のように青い。

私はその、あっけらかんと虚無的なまでに明るい空から視線をずらせて、本物の空を眺めた。天井に高く開かれた湯気抜きの窓の間から、灰色にちょっぴり青味を加えたような十二月の東京の空がのぞいている。

どんよりと明るい――というと変な言い方だが、実際そんな感じの空だった。晴れているのだが、

青空ではない。排気ガスに汚れてしまった大気を台風が吹きとばしてくれた後でもなければ、めったに澄んだ青空など見ることができない時代になってしまったのだ。

午後三時を少しすぎた時刻で、この三時から開く銭湯の男湯には、私と、それから長髪の痩せた青年がふたり、計三人がぼんやり透明な湯ぶねにつかっているだけだった。私はさっきから後頭部を浴槽のふちにのせ、長々と手脚をのばしたイカのような恰好で壁のペンキ絵を眺めていたのである。

それはどこにでもあるありふれた風呂屋のパノラマ画にすぎない。だが、私はなぜかそんな銭湯の壁画を眺めるのが好きだった。子供の頃もそうだったし、中学生時代も、青年期も、そしてもう間もなく四十歳に手のとどこうという現在にいたるもそうなのだ。その遠近法を極度に誇張した、月並みといえばこれ以上月並みはないと思われる絵をぼんやり見ていると、まるで自分が実際にそんな風景の中にいるかのような快感が湧いてくるのである。

湾と岬。そして空と水平線。近景に松の枝がのびて、そのむこうに青い入江と、時には富士山などもそびえている。どこの銭湯でもほとんど似たような構図であって、私はそこが気に入っているのだった。しかし大学に進む年頃になると、私は自分がそんな幼稚な趣味をもっていることをひそかに恥じ、他人にそれを隠し始めた。うっかりそんなことを喋ると、仲間の頭のいい連中から嘲笑されそうな気がしていたのだろう。

だが、今はちがう。風呂屋のペンキ絵が好きでなぜ悪い、といった居直りめいた心境で楽しんで眺めている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

居直り、といえば、実際その通りである。こうして騒がしい世間をよそにぼんやり日を送っているのも、一種の居直りにちがいない。まだそんな生活を始めてそれほどたってもいないのに、以前の自分とはまるで違ってしまったような気がする。

湯気がペンキ絵の画面で露になって、糸を引くように落ちてくるのを眺めながら、体中の筋肉をゆるめっぱなしにしていると、ガラス戸の開く音と、冷い外気と、男の大声に喋りあう声が一時に頭のうしろから流れこんできた。

「いや、まったく。どうですか、あの入口にかかっていた木の看板の格調正しいこと。公衆浴場椿湯、北村伝次。ぴしっと決った感じじゃありませんか。いいねえ、実にいい」

「それよりもさ、あの番台のうしろの貼り紙が傑作じゃないの。ステテコ、半袖シャツ有ります、時価——とこうくるからね。何ともうれしくなっちゃうよ」

「軽便剃刀くださいって言ったら、十円のと七円のとどちらになさいますか、って」

「どっちにしたんだい」

「思い切り奮発して十円のを二挺」

「贅沢は敵だ」

「欲しがりません勝つまでは——ですか」

「お互いに古いね。年が知れるよ。あんたもやはり防空頭巾かぶって登校した組？」

「そうです。十年」

「じゃあ、ぼくと三つちがう」
浴場の天井に反響するような声高なお喋りとともに、青白い臑(すね)が四本、ざぶりと私の肩ごしに割りこんできた。
一人は最近めずらしいオールバックの長髪で、鳥のように尖った顔をした中年男、もう片方はよく肥って恰幅のいい丸顔の人物である。二人とも真新しい手拭いを持ち、ひげも綺麗にそっている。何かうわずったような上機嫌で、大人げないはしゃぎようだった。私は伸ばしていた体をちぢめ、浴槽の隅に膝を曲げて彼らのお喋りを聞くともなしに聞く恰好になる。
「しかしなんですね、昭和元禄の舞台みたいな六本木、青山の付近に、こんな庶民のふるさとみたいな一画がひっそり残ってるんですからねえ。意外だったなあ。この辺は戦災ですっかり変っちまったと聞いてたけど」
「竜土軒は以前の場所とちがってるな。この椿湯だって建物は戦後のものだろう。ただこの裏のあたりの横町には、古い町のたたずまいが残っているようだ。うさぎ横町とか言ったそうだが」
「しかし嬉しいじゃありませんか。大体、町はふるさと、なんて続きものの企画を持ってこられたとき、正直いってうんざりしたんですよ。だけどまあ、青見沢先生ならまた違った角度から面白いもの書いていただけるんじゃないかと考え直しましてね」
「どうかな。ぼくももういささか新鮮味が薄れたなんて編集部に思われてるらしいから」
「ああ、いい気持だ」

年嵩の男の半分本気の苦笑いを肥った丸顔の方は知らぬ振りでうけ流し、ジャーナリストによくある図々しいと言うか人懐っこいというか、屈託のない口調で、湯ぶねに入っていた二人連れの先客の青年に喋りかけた。

「ぼくらここははじめてなんですがね。雑誌の取材でこの辺あるき回ってたんですが、この銭湯の玄関見たら何となくはいってみたいような衝動に駆られて。公団アパートの狭いガス風呂にくらべると天国ですな、こいつは」

「……」

話しかけられた痩せた長髪の青年は何も答えず、ざぶりと両手で顔をぬぐってそっぽをむいた。

「じぶんのとこに風呂がないからくるんでないの、みんな」

と、もう一人の青年が、訛りの強い口調でぼそぼそと呟いた。

「うん、そりゃそうだけど」

なんとなくタイミングが合わない感じで口ごもった男の言葉尻を、もう一人が受けて、

「しかし若い人はいいなあ。引き緊った体して、うらやましいですよ。ぼくらもう銭湯の鏡に己れの体を写して見るのさえおぞましい感じでね」

「年とると誰でもそうなるんだから、仕方がないんでないの」

と、同じ青年がそっけなく言い、いささか鼻白んだ二人を残して、ざざっと湯から出て行った。

すると肥った丸顔の男は照れ隠しの微笑を湯気のむこうから私のほうに送ってよこした。

「このお近くですか、失礼ですが」
「ええ」
私はうなずいて、困ったことになった、と考えた。そろそろ出ようとしていた所なのである。そうでなくても余り他人とは口をききたくない心境なのだ。
「この辺は何となく風情があっていい所ですね」
「ええ」
「この裏手に古い褐色の木造の洋館が残っていますね。あれは相当に古いものなんでしょう?」
「さあ」
私は額の汗をぬぐって、湯の中の屈曲した自分の下半身を眺めた。
「この辺へ引越してきてまだ日が浅いもんですから」
と、私は言った。相手は、なあんだ、といった表情で、
「そうですか。なかなか面白そうな所ですよ、ここは」
ええ、と私はあいまいにうなずいて、ちょっと頭をさげ、体をのばして湯ぶねから出た。私には彼らの何となく浮き浮きした気分が判らないでもなかった。十日ほど前に、はじめてこの町へ足を踏み入れた時、私もやはり彼らと同じようなちょっと気恥かしい興奮をおぼえたのである。その場で不動産屋の主人にすすめられるままに、手金どころか契約金の全額を払い込んでしまったのもそのせいだった。

そうなのだ。私はこの町へ、まったく偶然に住みついたのだ。ちょうどタンポポの白い羽毛が風に飛ばされて見知らぬ土地へ漂着するように、私はここへやってきたのである。そして、ほんのわずかの時間、この一画をぶらぶら歩き回っているうちに、自分でも不思議なほどこの町に漂っている空気に惹かれてしまったのだった。

私はどこか遠くへ旅に出たいと思ったりもした。そしてその気になれば、それも決して不可能なことではなかった。だが、東京の、それもこんなにぎやかな場所のすぐそばに、まるで忘れられた小さな王国のようにぽっかり存在している古びた町を発見したとき、もうどこへも出発する気はなくなってしまったのだ。ここに住もう、と、私は決め、そしてボストンバッグひとつさげて、やってきたのである。

湯気に曇ったガラス戸を開けて脱衣場に出て来た私は、手拭いを下腹部に当てたまま、まずその脱衣場の左奥にある計量器に自分の体をのせてみた。計器の針は五十五キロを指して小さく震えている。ふだんの私の標準体重は五十七キロだった。何かの本の中で読んだ、身長マイナス一一〇という数字をあてはめてみるとそうなるのだ。私は百六十七センチの身長を持っていたから、五十五キロでは少し痩せすぎではなかろうか。しかし、それでもこの町へやってくる前よりは、まだましである。春から夏へかけて、勤め先の大学が最も混乱していた時期は、五十二キロにまで減っていたのである。それは、まさしく良心的知識人の見本のような姿だったと言えるだろう。私はその私

立大学のありかたを真っ向から否定して大学教育そのものの観念さえ変革しようと考えている学生たちと、同じ立場に身をおこうとした。そして大学経営者の側からは造反教官という恐しげな烙印を押され、理事たちからいくつかの好条件を示されて自発的な退職を求められることとなったのである。私は最初その闘取引を蹴った。学生たちは全面的に私を支持し、闘争の先頭に私を押し立てようとしたが、やがて私自身の中の中途半端さ、臆病さ、十九世紀的な人道主義的傾向に呆れはて、やがて私を非難するようになった。それは最近、どこにでもよくある話のひとつに過ぎない。私は学生たちの闘争の動機の正当さに共鳴し、その方法の無茶さ加減にたじろいだだけの事である。敵対するグループの学生に対する拷問や制裁を、私は認めたくはなかった。そして学生たちから嘲笑され、同情されながら混乱を続けている大学の現場からすすんで脱落したのだ。ごく月並みな、そう、あの銭湯のペンキ絵のように月並みなケースにちがいない。

私の妻と八歳になる娘は、共同して私の退職に反対した。近頃の子供は、それ位にませているのだ。彼女は妻の、私を責める言葉を、すっかり憶えてしまって、同じ文句で私を批判したのである。

私の妻は関西で農業機器の製造をやっている工場主の次女で、流行の化粧法や新傾向の洋服などをそれほど下品でなく使いこなす感覚を持った短大出の女である。〈暮しの手帖〉と、〈ハイファッション〉とを欠かさず読み、英文タイプとローケツ染めにひそかな自信を持っていた。

私は大学院の研究室にいた頃、先輩の紹介で彼女と知りあい、恋愛めいた何年かのつきあいののち婚約した。彼女は私に大学内での名誉や地位を望まなかった。一生講師のままでもいいから、土

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.